平成18年度　8020公募研究報告書抄録

研究課題：専門的口腔ケアによる高齢入院患者の合併症軽減とQOL向上に関する研究

研究者名：北川善政[1)]、佐藤　淳[1)]、山崎　裕[1)]、佐藤　明[1)]、村松真澄[2, 3)]、横畑千春[2)]、鄭　漢忠[4)]

所　　属：[1)] 北海道大学大学院歯学研究科・口腔病態学講座口腔内科診断学教室

[2)] 北海道大学病院看護部、[3)] 北海道大学大学院歯学研究科・口腔健康科学講座・博士課程

[4)] 北海道大学大学院歯学研究科・口腔病態学講座口腔顎顔面外科学教室

【背景および目的】最近の手術療法や放射線療法・化学療法の進歩により口腔癌の治療成績は上昇しているが、その反面超高齢者にも拡大手術などの侵襲の大きな治療を適応するケースも増えており、それに伴う重篤な合併症も報告されている。術後感染症などの合併症は原疾患の治療の遂行に支障をきたすのみでなく、追加治療の必要性や入院期間の延長による患者の肉体的、精神的、経済的負担を強いることになる。最近になり口腔外科領域の手術の術後感染症の原因菌の多くは口腔常在菌によることが報告されるようになった。口腔常在菌を制御することは頭頸部外科での術後感染のみならず、肺炎などの呼吸器合併症の回避のためにも重要と考えられるようになってきた。本研究の目的は、口腔癌と診断された入院患者への計画的口腔ケアが口腔内の細菌およびカンジダの検出を減少させ、さらには感染症や発熱などの全身および局所合併症の減少につながるかを検索することである。

【研究対象および方法】 悪性腫瘍と診断された入院患者のうち治療前から計画的口腔ケアが施行できた 29 例（ケア群：男性17例、女性12例、平均70歳）を対象とした。コントロール群は計画的口腔ケアが行えなかった28例（男性17例、女性11例、平均67歳）とした。ケア群では、歯科医師による専門的口腔ケアを1回/日および患者自身でセルフケアを5回/日行った。口腔内の状態の評価および細菌学的検査は、入院時、治療前、退院時の3回施行した。両群間で肺炎などの全身合併症、術後感染などの局所合併症の有無を比較した。

【結果】入院時カンジダが検出されたのは8例で、そのうち4例は治療前にはカンジダが検出されなかった。残りの4例は治療前にはカンジダが検出されたが、退院前には検出されなかった。入院時のカンジダの検出と歯肉の状態には有意な相関が認められた(Spearmann 順位相関検定：$p=0.03$, $r=0.48$)。入院直後の検出細菌は口腔常在菌としての緑色レンサ球菌：14例、非病原性ナイセリア：12例が多かった。MRSAや日和見感染に関係すると思われるPseudomonas aeruginosaやAcinetobacter speciesは、一度検出されると持続的に検出される傾向が認められた。全身合併症はケア群：1例（3%）、コントロール群：2例（７%）で有意差はなかった。局所合併症はケア群：5例（17%）、コントロール群：12例（43%）で口腔ケア群で有意（$p<0.05$）に少なかった。38度以上の発熱の日数は有意に口腔ケア群で短かった（$p=0.03$: Mann-Whitney U 検定)。多変量解析では、口腔ケアは局所合併症を軽減させる有意な因子であった。

【結論】口腔ケア群とコントロール群の比較による単変量解析の結果では、術後肺炎などの全身合併症の頻度に差は認められなかったが、38℃以上の発熱日数は口腔ケア群で有意に短く、術後感染などの局所合併症の頻度は口腔ケア群で有意に少なかった。多変量解析においても口腔ケア群の有無は局所合併症を減少させる有意かつ独立した因子であった。本研究の結果は、口腔癌という口腔ケアが導入しにくい特殊な対象に対しても、計画的な口腔ケアを治療前から行うことで局所感染などの合併症を軽減でき、患者の早期回復・健康増進に寄与できるものと考えられた。